

# 障害のある個人の『キャリア・パスポート』： 継続的支援のためのポートフォリオの作成

望月 昭

(文学部教授・人間科学研究所前所長)

大雑把にいきますと、アーカイブと就労支援事業での具体的な試みとしてどういうことをしてきたか。アーカイブということの意味と具体的に情報を蓄積していく意味と2つあります。

単に、データの保管場所を提供するだけでなく、どういうふうに個別の個人の情報を編集していくかという役割を含めたアーカイブ作業と考えているわけです。

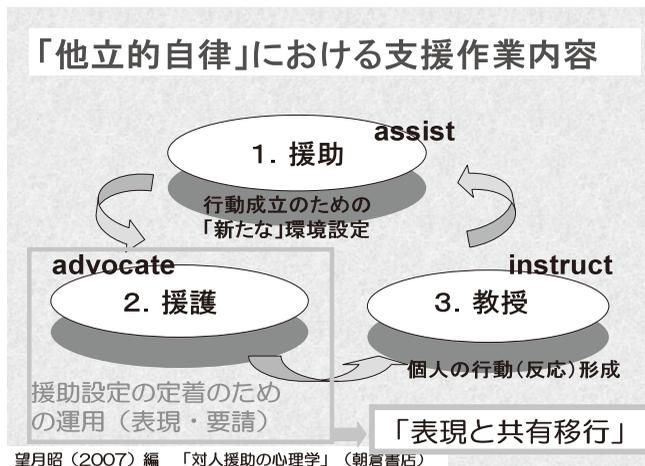
I. 自立と自律		
autonomy alone?	自己決定	他者の指示
単独遂行	自立的自律	自立的他律
援助つき遂行	他立的自律	他立的他律

われわれ自身は、  
どのように過ごしているか？<sup>2</sup>

就労支援チームとして、キーワードとして「他律的自立」という言葉を使っていますが、これは「援助つきでも自分で決定していく」という状況ですね。これがQOLの拡大という意味で、これまでとすると自分一人で作る「自立」ばかりが結構、目標になっていますが、もう一回、考え直して、どういう環境設定、人的、物理的な「援助設定」のもとで、「自律的」な＝自らが選んだ）行為が成立するかということに注目しようというわけです。行動心理学的な考

え方でもあるんですけど、特に障害がある人の自立、QOLの拡大という時には、もう一回、その原則（援助つきでの自律）を確認した上で方法論や手続きを考えるべきだろうと考えての言葉なんです。

援助つきで行動が可能になって、それが選択肢の拡大につながっていくというパラダイムで、対人援助の時の作業は、「援助」・「援護」・「教授」という3つの作業に機能的に分解されるだろうと。



昔は「リハビリテーション」的な作業が強くて、適応という形で本人の行動を変更していく、「教授」が中心で、だめだったら社会の手も借りようと「援助」が入ってくる。それに対して、この何十年か、ノーマライゼーションとかインクルージョンというものの背景もあって、まずは先送りすることなく、「今」、行動が成立するように「援助設定」を考えていこうと、つまり、「援助」を優先する、それは今まで社会の中になかった「新しい環境設定」として導入するわけですから、広く社会に認めさせる作業が必要だと。そのことを「援護」という言葉で書いていて、この作業が、今までの障害のある生徒を「教育」しようということと違って「支援」という言葉に変わっていることの内実でもあると思うんです。単に本人を変えていって教育していくということではなく、「これ」があればこの子はベストパフォーマンス出せるんだ。そしてこれは、本人だけではなく、必ずまわりの人に説得していく作業が必要だと。表現と情報共有、移行ということが不可欠な作業として出てくることになるわけです。このことがアーカイブとも関連してくるわけです。

## II. 「これ（援助設定）」の内容：

### A. 物理的・直接的支援としての「これ」

- 0) 目標設定を、(一旦)緩める
- 1) 身体的・物理的な援助を加える(身体的プロンプト・支援ツール・AAC)

### B. 周囲を含めたポジティブな転換としての「これ」

- 2) 行動拡大と周囲のポジティブな評価に展開できる新しい設定(役割)づくり

### C. 当事者の選択(=自律)を認める、という「これ」

- 3) 当事者に選ばせる
- 4) 当事者が、「これ」(援助設定)を利用したり作ったりする(セルフマネジメント)

援助設定はいろんなレベルのものがある。コミュニケーションでいうところのAACとか個別の反応を援助するような物理的、身体的な支援、あるいは、もう少し関係そのものを見て、現在できる行動を見出していこうと。(今、示している行動の中には)ネガティブに評価されている場合もある。「余計なことをしちゃうやつだ」とか。それもある文脈をつけて表現すれば(=援護)、「そういうことも『できる』』という展開もできるわけで、周囲に「あの人はあんなことをしているけども、実はこういうふうにも展開できるんだ」という、実際にそういう状況をつくってみて、という実験をして、周囲から受け止められたら本人の行動の選択肢も増える。

そして、援助設定として大きいのは「当事者に選ばせる」という部分ですね。その中にも含まれますが、援助設定自身で現前の作業を工夫していくようなことを中心に支援していくこと。これももちろん「援助」つきでいいんですが、「セルフマネジメント」にも入るんですが、「これがあればできる」、それについて自分自身がそれをつくったり、利用することが重要で、そういうものもきちりスキルとして考えていこうという方針なんですね。今まで学校教育では、これが十分にクローズアップされてなかったように思えます。いろんなレベルでの「援助設定」を、今までと考え方を変えて、必要ならば環境設定を変えたり、制度とか学校のカリキュラムとかを変えてやっていこうということですね。

### Ⅲ. 「できる」を表現して伝えること

- 従来、学校では「個別の指導計画(IEP)」、福祉現場では「個別の支援計画」  
「何ができるか」は記録しても、
  - ・何があったら(援助)、
  - ・どうやったら(教授)それができるようになったか、という支援内容とそのプロセスの記録がない。
- 学校内・福祉施設内・企業内  
会議(ケース会議など)はあっても、書類として残されない。  
→ 当事者が自分データとしてハンドリングすることができない。

(厚労省調査;平成22年度 指定課題調査)<sup>5</sup>

今、申し上げたことは表現して伝えていかなければいけない。本人だけをトレーニングして、あと、「さあ頑張りなさい」というのではなくて、「情報」をつけていかないといけない。本人だけ見てもわからない。今までの経過の中で、どんなものが必要だったか、今、どんなものを必要としているかを書かないと、うっかりすると「0スタート」になってしまう。本来、そういう書面は学校では「個別の指導計画」、IEP、また福祉現場では「個別の支援計画」があって、個別の個人個人に書類がある。ところがそこに書かれていることは「何があったらそれができるのか」という書き方をしてなくて、通信簿の記述のように「あれができます、これができます」という答の属性的な表現でしかないことが多かった。

もう一つは、同じ教えることでもここに至るまでどんなプロセスを経て、今必要な援助設定なり、あるいは、教える時にこんな教え方をしたらこの人は入りやすいというプロセスの記録が少ないわけですね。そのことを情報の連携、他職種の人との連携、特別支援校の中でいえば小学部から中学部、高等部への情報の移行が少ないわけですね。もちろんこのあいだ調査研究のインタビューで、学校や福祉施設で「情報移行と連携していますか?」というと「しています」と皆、いうんだけど、確かに学校の中で先生がケース会議して、ある生徒について話題にしている。立ち話をして、どうなっているかという情報はあるようにみえるんですが、それが実は残っていない。どんなことがそこで引き継がれたのかがなくて、結局、それは「揮発」というか、なくなる。本来、そう

いうことをつないで書いていくのが個別の指導計画だったはずなんだけど、実際には1年に一回、通信簿に書かれているようなものが残される状況が多くて、実際に新たに実践したり、実習する時に、こういうことは気がつかなかった、こういう状況があるとこの人はいいよねというものが、口伝え以上では伝わらない現状があるわけです。

そこで何が問題になるか。当該の先生方とかが異動したら、わからなくなる、という「援助者間の情報移行」のこともあるんだけど、なにより本人に何も情報が残らない。まわりの人や関係者の間ではわかっているけど、本人に残すものがないので、後々、就労の状況になって「この人は今までどういうふうに来たのか」は誰も答えられないということが問題になってきます。厚労省の平成22年度の調査でも、まさしく「本人がハンドルする機会がなく、もっぱら連携というものが進んでいる」。

#### IV. 「就労支援チーム」とアーカイブ

- 「学生ジョブコーチ」による就労支援
  - 1) 生徒・成人における学外事業所での就労実習支援
  - 2) Café Rits での就労実習
- 目的
  - 1) 就労関係行動の(支援)技法の開発
  - 2) 個別の「ポートフォリオ」(「できる」の経過記録)の表現方法の実践的研究



6

そういう状況の中で当プロジェクトの「就労支援チーム」は何をしているか。障害のある生徒だったり、福祉施設の利用者だったり、そういう人の就労の実習に学生がつきそって、「ジョブコーチ」的な、ある作業ができるように支援することをしているんですが、その中で目的として、まずは支援の技法の開発があります。そして、もう一つは個別の「ポートフォリオ」の表現方法をどうしたらいいかということを検討しています。プロのジョブコーチはそういうことをやっている暇はなくて、ある職場への適応の作業に走るわけですが、学生はそこで「この人はどの条件ならできるか」ということを徹底的に記述していく。

かなり実験的などころもありますが、いろんな変数を入れてみて「確かにこれがあればこの人はいいね」という作業を書き残していく。

場所としては学外の事業所とか、Café Rits（カフェリッツ、社会臨床実習室で模擬店）でもやっています。その意味は、徹底的に構造化した中で、一人ひとりの当事者が、「これまで何ができたから次は何をやったらいいか」と具体的な計画を細かく立てて、それを実験的に、変数の操作をして確認していく。確認作業を丁寧なものをやっていくという意味があります。

一例を出しますと、京都市のある総合支援学校と共同で実践研究をやったんですが、ある生徒のある実習をつきあっていく。地域の実店舗のホームセンターでの総合支援学校の生徒の就労実習に、学生が一緒に行って、徹底的にその作業とパフォーマンスについて記述していきます。そして「こういうこと（作業内容、物理的・人的支援）なら『できる』みたいだ」というのを「できますシート」という書類として書いていく。実際の外部の店舗ですから、そう好きに試したりということではできないので、観察の中で、「できること」を相関的な形ですが、「これなら（これがあれば）いけるんじゃないか」と書くわけです。そこで確認したことをもう少しきっちり確かめてみよう。あるいは、もう一歩進めた形で何ができるか。それをカフェリッツの“人工的”な場面で徹底的に確認していくことをやります。そこでまた新たに「できますシート」を作って、次の実習に使っていきこうという「情報の蓄積と移行」の実習（実践的実験）をやっていくわけです。

アーカイブというのは、まさに実習中、「今までこういうことができた」から次に編集して「次にこういうことができるのではないか」。ただ書類をつくることだけではなく、実験的に確認する。大学のカフェリッツで。拡大した作業について実証的にやってみる。そこで広がった可能性を書類にして本人に持たせることを考える。これが本人の「できますシート」、ポートフォリオです。「できますシート」を学校の先生と共同でつくったんですが、行動の成立に先行する事象と、実際に何ができたか、そして、どういう結果がもたらされたか。まずは、それらの個別の行動の成立を詳しくたくさん作って（表現して）いくのですが、それらを、いくつかまとめて表現して、より一般的な行動的な表現として、当事者個人の「能力（援助つきでもよい）」を書いていく。そのことを確認するにはどうしたらいいか。次の一歩を皆に提案してもらう。それを学校の先生、親御さん、本人も含めてやるわけです。次の場面では「こんな実習する

時にこんなことをしたらどうか」。これが「できますシート」の一つの例です。

話し合いの場で、どういうことが行われたか。ホームセンターに行った後、中身について具体的に学生が「こんなことができました」と先生と親御さんに伝えていく。その時に「次はどうしましょうか」というふうに「できますシート」に書いてある。あくまで今できることを生かしてその発展として、「次の実習ではどんなことができるでしょうか」と展開する。そして(これはカフェリッツでの実習を念頭においてのことですが)、「喫茶店場面だったらどんなことを生かすことができるでしょうか」という検討を行う。シートには、上半分にこれまでのホームセンターで「できること」が書いてあって、応用として下半分に、「喫茶店業務で、大学の中のシミュレーションショップでどこまでできるか」を具体的な計画として書いていく。このシートの例では、「スケジュールを自分でつくって、それを見て自分で動ける」展開を試みようという、喫茶店業務の中の一つの仕事として提案している例です。

この後、そのことを、どう記述するか。この事例では、約2週間の実習をして「個別にできることをいくつかまとめて表現する」といいましたが、ここまではマッチング系の「できた」。セルフマネジメント系の「できた」、その中の二つを上げています。「マッチング系」はデリバリーの配達業務を含めて伝票を見て展開することが全部できた。「金銭系」で数字をマッチングして自分でレジに入力する。さらに金額を見て実際のおつりの計算、それには何をやれば、よくできるかということが開発され、発見されて書かれたということです。「セルフマネジメント系」の「できた」は、それまではデリバリーで店長さんに「行ってきてください」といわれて配達するんですが、電話を受けて自分で予定表に入れて、それを見ながら店長に「そろそろ時間なのでコーヒーをつくってください」といって自分で配達する。手のこんだ構造があって、回収時間と配達、どんどん電話がかかってくる、「入れこ」になったりするんだけど、それも自分で調整していける、そこまでできるかどうかを確認できたということがあります。

ということで、「できます」という部分を、前提条件、「これ」があればできます、というデータを太らせていって、本人に持って帰ってもらおう。できれば次の就労の場面でも使ってもらいたいし、そのようなときに機能的なポートフォリオができていく。次の職場でどんな就職をしたいかという時には、この中で、もう一回編集して取り出すことができる。それに関連した業務について

「それならここまでできる可能性がありますよ」と提言できる。「ポートフォリオ」はただそこに過去の事実が羅列されている「資料集」としてのみではなく、前述したような、次の作業に向けてどんな情報を選択しアレンジするかという合議のための編集・コーディネートする機能も、前提として持てるようにシステムごと考えることが必要だと思います。

まとめとしては「ポートフォリオをつくってみよう」という提言で、そうすると実習も変わっていく、それに加えて学校の教育の中身も変わってくるのではないか。たいてい「データを見せてください」というと、充分に書かれていない。大雑把なカリキュラムがあるが、「当事者がどうか」という話は学校の中で出てこない。外部の人がからんでないから言葉で伝える必要がない。外部者が入って「教えてください」という働きかけで、そういうものが書かれていくだろうと。大きくアーカイブというのも、ここに収納してとっておこうということになると、それに耐えるものを書かないといけないと学校も考えると思います。そういう効果があるかなと思います。今まで調査でやったことですが、そういう情報をどこに残しておくか。市町村によっては市でもって、学校の資料を引き継いで市のコンピュータでもっているところがありますが、まだ雑多なままファイルしているだけで、後で取りだすこともできないし、後のキャリアアップに、就労したいとか、福祉施設にいくのでも、「この人は一体、何ができて、何が好きなのか」という情報を採り上げられるようなことにはなっていない。そういう観点から情報を蓄積して、我々のできることはさらに次の目的のために編集し直す作業ができるのではないか。ポートフォリオを、「キャリアパスポート」として大学という「第三者機関」が保管して当事者の様々な移行に際してリクエストがあれば情報の選択についてのアドバイスをするという実装もありではないか。

所属している学校に持たせておくと卒業後はどうなるか。またなかなか本人にハンドルする機会がないことが多い。前述したように、市が統一してサポートファイルの形でやり始めていて、注目すべきところですが、まだ医学情報が強くて、障害の特性が書いてあることがあって、「どんなことがあればできるのか」、ポテンシャルとかが書かれてないので、そのへんも大学ならではの編集の仕方ですんで保管しておくということが可能ではないか。基本的には「ハンドル権は本人にある」。次の就労の時には大学のファイルを使って出していこうと、そういうふうに使えないかということです。

## 〈質疑応答〉

**松田** ありがとうございます。質問ですが、「できる」ということは、実習計画の立案のスケジュール作成で、「できる」ことというように記述していくんですか？

**望月** いくつかあるんですね。上半分が「今までの実習でわかったこと」で、これを見ながら皆で議論して展開して確認することで「次の実習でどうやったらいいか」が下半分に書かれていて、カフェリッツを使うと、ふんだんにカスタマイズして、状況がつかれるわけですね。そこは遠慮なく、どんどんいってくださいと書いてもらって。これまでのような実店舗とか学校の中だと、やれることとか発想が小さくなる。喫茶店業務をやるとなったら、どんなことが彼にはできるか。学校の先生は豆の袋詰めとか単純作業を出してくる。実際の就労になるとバックヤードになるという現実からのフィードバックから学校では発想が広がりにくい。それをもう少し自由に考えていく。学生や第三者だから、できることもあって。そうしないと、どんどん障害のある人が単純作業に押し込められて、広がっていかないところがあるので。現実そういう仕事が、後でできるかはわかりませんが、ポテンシャルとしてはこういうことがあって、実際に立ち返ってみましょうというポートフォリオをつくっていきたいと。

**松田** 本人が「できること」ではなく「何があったら、どうやったら」ということへの理解に注目するということですね。

**望月** よく「電卓ができます」という記述がありますが、実際には紙の計算ができたりするだけだったのに、職場に入ってから自分の就労時間を計算して入れておいて、という、違う状況の中で期待されたりするので、過不足のない表現を、うまくしておかないとだめだということがあるんですね。

**松田** 「できる、できない」は、ある程度、再現性、継続性が必要で、ある時にできたことが、同じ条件であればできる。これを同定することが難しいですが、仮にできたら、同じように、できると理解していいのでしょうか。

**望月** 現実の一般的な実習では瞬間的ではしかなかったことが記述されていることもあるので、カフェリッツはそれを繰り返しやる。実験計画を立てる。逆にあえて実験をするわけです。確かに「これがあればできる」というデザインを組んでやる。理想的に。

松田 コントロールされた中でやる。

望月 完全に構造化された中で、コントロールされているからこそ「できます」というのはかなり信頼できるものであろうと。今まで「できない」というのが「できる」と確認されたり、逆もあるわけですね。先週までやっていたのは「手でおつりを数える」と間違うんだけど、青い皿に乗せると、できる。という事実がありました。それがあれば、この人はできる。(青い皿というのも)信用金庫の社員みたいに持って歩けばいいじゃないかという提案ができる。そうすれば100%できますと。そういう細かいことを見つけることもあるんです。

土田 大学という場で、できることとして、コントロールされた実験場面で確認できるというのが。

望月 まさにシミュレーションということですね。

土田 そこに重要性があると。

望月 実際、店舗としてやればいいじゃないかということだけど、そうだからいいこともあるんだけど、偶発的なことを待つことになることもある。徹底的に実験があって、記述も完全に。学生もいる。物理的な空間で変数を入れたり、支援状況も学生がコントロールすることで確かなものに変えていくということで、どうだろうか。アーカイブはそれも含めた情報を蓄えていけるということですね。

土田 情報の蓄えの中で自分がハンドルするということが大事だと思うんです。自分がハンドルするのは蓄積だけではなく、というところなんでしょうか？

望月 自分が、という意味は、現状ではどうなっているか。学校の先生と自分と親ですよ。それとたまには専門家がついていることもあるんだけど。情報の移行で、書類をつくるんだけど、どこにためておこうか。学校にしようか、市役所にしようか。そうすると個人情報を持ってくるのは嫌だという動きがある。それは「他人」情報だから。自分もっていればいだろうというけど、こうやって渡したら、なくなっちゃう。それを「貸し金庫」のように機能的にもっていて、自分で好きな時に出せばいい。市とか学校が嫌だったら民間銀行のように大学もっていたらいいじゃないか。その時の付加価値として編集作業をつきあえることもある。そういう専従のコーディネーターが、これから必要ではないかといわれているんですね。情報のハンドルを支

援する立場。コーディネーターです。特別支援のコーディネーターは、そういうことを考えていく必要があると。